

Title	女子学生の食行動不適応に与える要因に関する研究
Sub Title	
Author	前川, 浩子(Maekawa, Hiroko)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2003
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.56 (2003.) ,p.127- 130
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成14年度[慶應義塾大学]大学院高度化推進研究費助成金報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000056-0127

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

化することにより「社会」を記述することが、どのような可能性をもつかということを開くプランである。それは空間を焦点化する認識をとることにより、時間論的認識傾向とは異なる認識地平を構成することができるかを指摘するための思考実験であるとも位置付けられよう。それにより、グローバリゼーションという空間に重きにおいた言葉で示される私たちの自我を取り巻く状況、すなわち日常生活を描き出す予定である。

都市理論の認識論的視座を明確化させるための経験的研究、という第二の課題に関しては、昨年度までの研究で行ってきた「北東イングランドにおける日本人の文化適応」についての研究を、先述のアパデュライが指摘するような「ディアスポラの公共圏」という文脈から読み解くという構想を練ってきた。この研究の第一段階は『日本企業のイギリスへの工場進出—従業員の文化変容—』（文部省科学研究費国際学術研究 課題番号 11694035 の報告書）の第六章「北東イングランドと日本人」で「北東イングランド在住日本人の習慣・宗教体験」であり、さらに関東社会学会に於いての発表であった。

当初のところこの研究は、北東イングランドに赴任した日本人従業員とその家族たちの異文化体験に焦点を当てるものであった。異文化体験のなかで、彼らが日本での生活・経験の枠組みをどのように北東イングランドのそれらに適応させ、そうでありつつも日本的な枠組みを保持し続けるかを考察してきた。この研究では、文化的なギャップを感じる日本人像を描くことはできても、ギャップが単に日本と北東イングランドの違いであるということからしか語ることが出来なかったと思われる。極言すれば、北東イングランド的なるものと日本的なるものの本質論的なギャップという分析者の恣意的な構築物に収斂させてしまう可能性があった。今後は、彼らを感じたであろうギャップを、グローバリゼーションと人々の想像力の絡み合い中心にした論点により再考察を試みる。それにより、異文化的間交流のなかで感じられるであろうギャップを記述するにとどまらず、異文化接触をもたらした背景を含めたより動的な像を結ぶことができるのではないかと期待している。

以上と平行して、1980年代の「江戸・東京論」について同時期の東京の都市構造の変化との兼ね合いから考察するという構想を練ってきた。これについては、言説分析という考察手段以外に、何らかの分析手段を模索してきた。この点についても、想像力により形成されるディアスポラの公共圏という文脈から読み解くことで、「江戸・東京論」の顕著な特徴である、都市空間の内向きな消費の背景を探りたい。

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程

女子学生の食行動不適応に与える要因に関する研究

前 川 浩 子*

問題と目的

厚生労働省が行った平成13年の国民栄養調査では、肥満度の指標であるBMI (Body Mass Index) の値が18.5未満で低体重に分類される女性の割合は20年前に比べ、20代で1.6倍、30代では2.0倍に増加したことが報告され、女性のやせの傾向は高まっている。日常生活の中にも、「ダイエット」や「やせ」に関する情報があふれ、人々の関心の高さもうかがえる。しかし、このような「やせ」を好む傾

向や、いきすぎたダイエットなどは、食行動や態度に不適応を生じ、健康を害することも事実である。特に精神疾患である摂食障害の問題は深刻である。摂食障害に関してはこれまで精神分析の流れから親子関係に焦点をあてた研究が多く報告なされていたが、人間の行動を考える上では、もはや一方的な環境要因だけで検討することは困難である。個人が持つ要因と、それに影響を与えるような環境要因の両方を考えることが必要とされる。そこで本研究では、女子学生の食行動の不適応状態と、それに及ぼす要因について親子関係だけではなく、日常生活の中にある要因や個人が持つ志向性と合わせて検討を行った。

方 法

調査協力者：首都圏にある専門学校、短期大学、四年制大学に通う女子学生 947 名。平均年齢は 18.8 歳であった。また質問紙の回収率は 98.4% であった。

測定：① 食行動・態度に関する質問紙：Eating Disorder Inventory (EDI)

Eating Disorder Inventory (EDI: Garner, Olmsted, & Polivy., 1983) は摂食障害患者の心理的・行動的特性を評価することを目的として開発された自己記入式質問紙である。EDI の信頼性と妥当性は確認されており (Garner et al., 1983), 摂食障害の研究において世界的に広く使用されている。EDI は 8 つの下位尺度を有しているが本研究では食行動や態度の中核をなす、「やせ願望」(drive for thinness), 「過食」(bulimia), 「身体への不満」(body dissatisfaction) 3 尺度 23 項目のみを使用した。

各項目は「いつも」「大体いつも」「そうであることが多い」「時々」「滅多にない」「全くない」の 6 段階で回答するようになっており、「いつも」を 3 点、「大体いつも」を 2 点、「そうであることが多い」を 1 点、「時々」と「滅多にない」「全くない」を 0 点とした。逆転項目に関しては、「全くない」を 3 点とし、順次、2 点、1 点、0 点、0 点、0 点とした。また、各下位尺度の得点はその下位尺度に含まれる項目の得点の単純合計和とした。

② ダイエット経験の有無 (ある・ない・今もしている)

③ 日常生活の中の要因

「テレビでやせるための特集をしていたら見ますか?」、「雑誌に載っているやせる方法を試したことがありますか?」、「あなたの家族で現在やせようとしている人はいますか?」、「あなたの友人はあなたによくやせることを話題にしますか?」、「人からやせたと言われたいか?」、「やせているほうが魅力的だと思うか?」、など、日常的に接する頻度の高そうな場面について質問項目を作成した。全部で 24 項目。全くあてはまらない、ほとんどあてはまらない、少しはあてはまる、とてもあてはまるの 4 件法による回答を行った。

④ 「太っているとされた経験」

「今まで人から太っているとされたことがありますか?」という項目を設けた。全くあてはまらない、ほとんどあてはまらない、少しはあてはまる、とてもあてはまるの 4 件法による回答を行った。

⑤ 親子関係質問紙：Parental Bonding Instrument (PBI)

Parental Bonding Instrument (PBI: Parker, Tupling, & Brown, 1979) は自己記入式質問票で、過去の両親の養育態度を過渡的に評価するものである。親の態度や振る舞いを記述した 25 の質問項目からなり、これは care 因子として抽出された 12 項目と、overprotection 因子として抽出された 13 項目から構成されている。調査協力者は 16 歳までの記憶をもとにそれぞれの質問について「あては

まる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」の4件法で記入する。父親、母親について別々に得られた回答から、調査協力者がもつ両親の養育態度に対する評価を父親の care, 父親の overprotection, および母親の care, 母親の overprotection の4尺度で点数化する。

Care は0点から36点で点数化され、点数が高いほど親が自分に対して愛情深く、受容的な態度で接していたと評価していることを示し、逆に点数が低いほど無関心、あるいは拒絶的だったと評価していることを示す。一方、overprotection は0点から39点で点数化され、点数が高いほど親が自分を幼児扱いし、支配的、干渉的な態度で接していたと評価していることを示し、逆に点数が低いほど自立性、主体性を尊重していたと評価していることを示す。

PBI の信頼性、妥当性については Parker (1979; 1981) 自身が検討を加えており、第三者による評定を外的基準とした妥当性検討で高い相関が見られることから、PBI 得点は調査協力者からみた両親の養育態度に対する評価であるとともに、過去の実際の養育態度をも反映しているものとして妥当性が高いと考えられている。本邦では竹内ら(1989)による因子分析的研究や妥当性検討(1990)についての報告があり、妥当性、信頼性を確認している。

結果および考察

「日常生活にある要因」として作成した項目について因子分析を行い(主因子法・バリマックス回転)、4因子を抽出した。第1因子は「テレビ・雑誌のやせる特集を見る、試す」、「エクササイズマシンが欲しい」、「やせる食品を試した」など、メディアからの情報を収集したり、市販のツールを用いたりするような項目を含んでいたため、「メディアや市販のツールからの影響」と命名した。第2因子は「やせているほうが魅力的だ」、「やせたと言われたい」など、価値観としてやせていることを望む項目を含んでいたため、「価値観としてのやせ願望」と命名した。EDI 尺度における「やせ願望」は行動に関するものであるのに対して、この因子では意識のレベルでのやせ願望であると考えられるので、次元は異なると判断した。第3因子は「家族でやせようとしている人がいる」、「家族がやせることを話題にする」など、家族内でのやせることへの話題や行為に関する項目を含んでいたため、「家族内でのやせの行為」と命名した。第4因子は「友人にやせようとしている人がいる」、「友人にやせることを話題にする人がいる」、「ダイエットごっこが流行った」など友人関係におけるやせることへの話題や行為に関することだった

Table 1. 食行動を日常生活にある因子、親子関係の要因から予測した重回帰分析結果

	過食	やせ願望	身体への不満	ダイエット経験
太っていると言われた経験	—	—	.27***	.08*
メディア・ツールからの影響	.13**	.44***	.23***	.33***
価値観としてのやせ願望	.11*	.32***	.24***	.18***
家族内でのやせ行為	.11*	—	—	—
友人によるやせ行為	—	—	—	.10*
母親の care	-.11*	—	—	—
母親の overprotection	—	—	—	—
父親の care	—	—	—	—
父親の overprotection	—	—	—	—
R^2	.08	.44	.33	.29
F 値	11.88***	210.67***	85.52***	54.18***

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$.

ため、「友人によるやせの行為」と命名した。

分析では、因子を構成する項目の合計点を用いた。

食行動に及ぼす要因を探索するため、EDI 尺度である「過食」、「やせ願望」、「身体への不満」、「ダイエット経験」を従属変数に重回帰分析を行った。独立変数には「太っているとされた経験」、や因子分析によって得られた 4 因子である「メディア・ツールからの影響」、「価値観としてのやせ願望」、「家族内におけるやせ行為」、「友人によるやせ行為」、そして親子関係の指標である「母親からの care」、「母親からの overprotection」、「父親からの care」、「父親からの overprotection」の PBI 得点を用いた。重回帰分析はステップワイズ法で行い、Table1 には重回帰分析の結果を示した。

「過食」においては、「メディア・ツールからの影響」、「価値観としてのやせ願望」、「家族内でのやせ行為」、「母親からの care」を含んだモデルが採択されたが、いずれも説明力が弱かった。

「やせ願望」においては、「メディア・ツールからの影響」が最も大きな説明力を有していた。また「価値観としてのやせ願望」もそれに次いで大きな説明力を持っていた。「やせ願望」を満たすために、メディアによって得られた情報やツールを用いたりすること、「やせ願望」の背後には一般的にやせているほうがよいとする通念、価値観が存在していることを示している。

「身体への不満」においては、「太っているとされた経験」が最も大きな説明力を有していたが、「メディア・ツールからの影響」、「価値観としてのやせ願望」の説明力も同程度に大きかった。つまり「身体への不満」を感じさせるのは他人からの評価によるものがまず大きいということが言えるだろう。

「ダイエット経験」には「メディア・ツールからの影響」が最も大きな説明力を有していた。「メディア・ツールからの影響」因子はダイエットを行う上で方法を参考にしたり、取り入れたりする項目を含むものであるため、メディアやツールに接触する頻度、情報への敏感さが実際ダイエット行動を行うことに影響していることを示している。また、微弱ではあるが、「友人によるやせ行為」も説明力を有している。「ダイエット行動」は家族ではなく、友人の行動に触発されるものである可能性を示している。

これまで摂食障害に関する研究では親子関係に焦点があてられがちであったが、本研究では摂食障害に至らないまでも、女子学生の食行動不適応には個人がダイエット特集により触れる機会を持つと志向性が強く反映されていることが示唆された。しかし、逆に今回は摂食障害患者を対象にしていることと、縦断的研究ではないため、これらの要因が摂食障害の危険因子であると断言することができないのも事実である。今後は、児童・思春期の時点から食行動に関する研究を、個人の要因、友人の要因、家族の要因と幅広く検討していくことが必要となる。

引用文献

- Garner, D. M., Olmsted, M. P. & Polivy, J. 1983 Development and validation of a multidimensional eating disorder inventory for anorexia nervosa and bulimia. *International Journal of Eating Disorders*, 2, 15-34.
- Parker, G., Tupling, H. & Brown, L. B. 1979 A Parental Bonding Instrument. *British Journal of Medical Psychiatry*, 52, 1-10.
- Parker, G. 1981 Parental reports of depressives—An investigation of several explanations. *Journal of Affective Disorders*, 3, 131-140.
- 竹内美香・鈴木忠治・北村俊則 1989 両親の養育態度に関する因子分析的研究. *周産期医学*, 19, 852-856.
- 竹内美香 1990 両親の養育態度と軽度精神症状—Parental Bonding Instrument の妥当性—. *精神科診断学*, 1, 91-100.

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科教育学専攻博士課程